

---

# ルナ

ダネクン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
ルナ

【Nコード】  
N7338U

【作者名】  
ダネクン

【あらすじ】  
少年、蓮栖れんすが、訪れた《隣国》で見つけた自動販売機から出てきたのは、200年間眠り続けた少女・ルナだった！  
全ての価値観が複雑になり過ぎた世界で生きるのに息苦しさを覚える蓮栖と、全てが違う未来社会に当惑するルナ。そんな二人についての物語。

ロー・クオリティーかもしれませんが宜しくお願いします m ( ) m ( )

## 第1話

近藤蓮栖こんどうれんすがルナに出会ったのは、都会の喧騒や廃熱や、その他諸々の混沌に溢れた、とても暑い夏の隣国でのことだった。

絶望の縁での出会いだった。

彼女と会う数時間前に、彼は自分の目的が果たせないことを知った。わざわざ海底管道アンダーゴーストに高い金を払って乗って、慣れない現地人とのコミュニケーションさえ厭わず進んだというのに、その努力は水泡に帰してしまった。

蟹の自動販売機を探していた。

理由なんて無い。ただ、日に日に大きく強力になってゆく隣国の風景を遠目に見ながら、彼はふと蟹の入った小さな冷えた箱のことを思い出した。皆 というのは、自分の周りに座り、ざわざわと話す学校の級友から、地元住宅区のご近所さんまで が同国の成長ぶりに顔を不安に染める光景に少し閉塞感さえ感じていた。息苦しかった。

そんな中での、『蟹の自動販売機』。

目もくらむような工業生産力や、世界に右に出るものの無い軍事力。

隣国のイメージと言うと、もう彼が生まれた頃にはその二つに限定されていて、その風景も、自分たちの国にある市街地と変わらなようなものであるが、そこに立つビルが遥かに高く、威厳を纏い、まるで中世の要塞のような風貌を呈している風に錯覚させていた。

でも、その沢山の要塞型建築物の山の麓に、安っぽいプラスチックの入れ物に入った、生の甲殻類を売る箱がある。信じられるだろうか？恐れて、何もしない回りの人々に、少しはその足元にある箱

を覗いて見たらどうなんだ、と蓮栖は、言つてやりたかつた。でも、もうない。

大体的な土地整備で、もうその希望の箱は他の不恰好な産業廃棄物と一緒にスクラップにされてしまったという。そもそも、廃棄になる前から、もう蟹の販売さえしていなかったらしい。海洋汚染が原因で、そもそも蟹なんて取れなかった…。よくよく考えればその通りである。とんだお笑いものだ。

悲しくなる自分が居た。でも、なんだか嫌だった。悲しくなる自分の気持ちを封じるために、それ以上に自分をせせら笑つた。

今度はその嘲笑が悲しく思えてきた。

ただ一つ発見があつた。

彼が来ているのは、隣国の、代表的な大都市のひとつなのだが、実は何処までもあの人々に畏敬の念を抱かせる風景が続いているわけではない、と言う事だった。

百年前の高度経済成長期の開始にあわせ、始まつた土地整備。しかし、見た様子からすると、どうやら元々あつた貧民街の上から、まるでそれらを覆つようにして半ば強引に始められたように見える。好景気の象徴ともいえる、洗練された白い高層建築物郡を支える地盤は、実際の地面よりも少し高い所にあつて、その地盤を今度は沢山の柱が物理的に最も効率の良いとされる配置で並んでいた。

その広さから、人工地盤の下側の空間は真つ暗だった。多分、吹き抜けになっているといつても、反対側の空気の出口が遙か先で、光が届かないのだろう。

ふと、柱と柱の間、まだ少し光が届いている辺りに、小さな、プレハブのようなトタン屋根の小屋があることに気が付いた。

貧民街の名残だろう。

少し気になつた蓮栖は、小屋の方に脚を運ぶ。

小屋に近づく程、人工地盤卓も近づいてくる。どんどん自分に覆

いかぶさつていく様なその光景は、まるで人々の衣食住、経済、文化を乗せた、巨大な金属の机が、自分の方に崩れかかってくるかのように見えた。そのせいも、蓮栖は一回、眩暈のようなものを覚えた。

いつまで経っても着かない。あまりの地盤卓の大きさに、きつと遠近感が狂ってきているのだろう、とそう思いながら、額についた汗を拭う。夏真っ盛りだ。暑くないわけが無い。

「…ちよつと、遠すぎないか」

独り言さえ出てきた。

かれこれ30分近く歩き続けただろうか。

こうしてみると、人工地盤は割と高い所にあることに気づく。10メートルなんてものではない。もっと高い。

複雑に入り組んだ柱の群れを少し越え、小屋に近づいていく。地盤卓の天板の下は陽が当たらないからか、涼しかった。

何も無い、この空間だけでもとんでもない大きさだろう。縦も大きく、横も大きいのだから。大声を出したら響く前に、空中で音が消えてしまいかもしれない。

もう10メートル先は真っ暗であり、まるで黒い液体で充滿しているようにさえ見えた。小屋の、少し褪せた青色が、解像度のもとも良い画像の様に、鮮やかに見える。

立っている空間に対し、小屋はとても小さかった。多分の平野にあっても、そんなに大きくは見えないだろう。昔写真で見た、何百年か前のの休憩場の様に見えるが、実際はどうなのか良く分からない。写真では休憩場には自動販売機があった。ひよつとしたら、スクラップを辛うじて逃れた、もう使うことの出来ないオンボロ自動販売機が、あつたりするかもしれない。

中に入ってみたかったが、ドアが無かった。透化物質か、と一瞬考えた。だが違うようだった。手で触れた途端、彼の手のセンサーはそれがただのプラスチックだと判定した。

「反対側にあるのかな…」

小さく、囁く声でそう言うと、彼は小屋の周りをぐるっと回ることにした。そこまで大きな小屋ではないから直ぐに回れるだろう。

そして、脚を動かし、回り始める。しかし、ドアが見つからない。もう一回、回ってみても、やはり見つからない。

「どうしたもんかな…」

蓮栖は壁に思いつきり近づく。今は、もと来た道とは反対側に面する方にいるためか、あまり光が差し込まない。しかし、その分、壁全体を良い感じの明るさで見ることが出来た。この小屋の周りの壁に透化物質が使われていないのは、さっき手で触って確かめた。

なら、小屋にドアは無いということだろうか…。でも、それでは腑に落ちないところがある。壁に何か仕掛けがあるのか…。

手を顎に当て、暫く考えた。

「まさか」

そう思つて、彼は足を上げた。考えた割りに原始的な方法だが、何もしないよりマシだろう。

小屋が崩れない程度に小屋の壁を蹴ってみた。

すると、その壁の一部が綺麗に小屋の内側に倒れた。

音はしなかった。ただ、少しだけ砂埃が飛んだ。

「マジ、かよ」

思わず口が動いた。自分の「まさか」と思っていた行動が当たってしまったことに、驚愕する。

どうやら、壁の一部が切り抜かれていたようで、そこにまた切り抜いたもとの壁を詰め込んでいたようだった。

改めて、自分の突拍子も無い思い付きがまんまと当たってしまったことに、少し唾然とするも、やっと中が覗けるようになったことを思い出し、小屋の中へと向かった。

純粋な好奇心、ともいえる奇妙な感情に背中を押され、ここまで辿り着いた。

そこからは若干陽が当たり、トタン屋根の青が小屋の中にも若干映えていた。少し暗い気がするが、中の様子を確認するには文句なしの明るさだった。

蓮栖は立ちすくむ。

最初こそ馬鹿馬鹿しい、と思って切り捨てた考えだったが、彼は少しづつ、これがひょっとしたら運命だったのではと思うようになっていた。

布を被った箱状の何かが、彼の前にはあった。

布は少し砂を被っているのか、少し地面と同じ色をしている。その物体は割と大きく、小屋の半分のスペースを占めていた。

蓮栖は、少しそれを眺めた。見覚えのある形だ。

自動販売機、だろうか。

にしては大きい、がだからといって違っても判断できない。彼が知らない種類の自動販売機にもっと大きいものがあったのかもしれない。

しかし、どちらにせよもう使うことはできないだろう。そもそも、昔と今では貨幣が違う。モノを買うのはおろか、お金を入れることさえできないに違いない。

でも、まあいいだろう。見つかっただけでも幸運だ。本当に販売機かどうか分からないのにも関わらず、蓮栖はそう思い、ほくそ笑み、布に手を掛けた。

バサツと布が取り払われる。それと一緒に砂の落ちるサラサラという音も一緒に聞こえた。また少し砂埃が飛び、蓮栖は目を瞑った。そうしながら少し待つ。慣れない砂埃は、時々咳を誘った。少し苦しいのは、ここが小屋の中だからだろう。狭い空間の中の砂埃は長い時間のぼり続けた。

抑えていた手を目から離す。

幸い余り目の中には入らなかつたものの、瞼や睫、目じりの辺りで砂が汗に付き、少し薄い層の様なものを作っていた。表情筋を動かすことにそれらが顔からパラパラと少しずつ落ちて、顔に張り付いていることをありありと知らせている。

指の先で砂を払いながら、耳を澄ませてみた。すると、

ヴーン

ヴーン

ヴーン

という、まるで機械の唸るような音がした。

それに気が付いた蓮栖は、砂を払う手を速めた。汗に付きしつこく砂は離れなかったが、大体なくなつたところで目を開けた。

その瞬間、心臓がきつく縛られたかのような感覚がし。

心拍数が上がった。

熱が出た。

目が、自然と大きく見開いた。

モンロー＝シュロッサーの美しい少女たち ビューティフル・ガールズ

そう英語の筆記体で書かれた緑色の自動販売機が、彼の目には映った。その左端あたりについた古めかしいデジタルディスプレイは明かりが点いていて、その自動販売機がまた動いていることを示していた。

## 第1話（後書き）

ども。ダネクンです。いかがでしたでしょうか…。今回は初投稿でよく色々と分からない事だらけなので、おかしな所があったら指摘して戴けたら幸いです。

## 第2話

『ビューティフル・ガールズ  
美しき少女たち』？

その自動販売機を見て、一番最初に蓮栖れんすが疑問に浮かべたことだった。

『ビューティフル・ガールズ  
美しき少女たち』。英語で書かれてはいたが、流石にそれくらいは辞書が無くても蓮栖は読める。

しかし、それが自動販売機の名前になってしまっている。

『ビューティフル・ガールズ  
美しき少女たち』……」

もちろん、言葉にただだけで意味が分かる訳ではない。

そもそも、買えるのか？

もし仮に、この自動販売機が百年前に作られていたものなら、購入は不可能ということになる。というのも、丁度その頃に、通貨が現在のものにならったからだ。

蓮栖はデジタルディスプレイの下側に認識装置があったのを覚えていた。自動販売機の左端、大体、彼の胸の少し下辺りの高さにそれらはあったと記憶している。

実際に近づき、見てみると、認識装置があった。しかし、一つだけではない。複数の装置があり、それぞれの貨幣で、いったいどれくらいの価格になるのかが、これもまた英語で書かれていた。そして、その中に、

S E R V I C E / V A L U E

の文字もしっかりと刻まれていた。サービスノバリユー。現在の通貨および、そのシステムの総称だ。

蓮栖は、この通貨制度がハッキリ言って気に食わなかった。

だから、その文字を見たとき、一瞬苦い顔をした。しかし、すぐそれで自分もこの販売機の中のモノが買える、ということを出

し、安堵した。

それから隣のショーウィンドーを覗いてみた。昔の自動販売機と同様、この販売機も商品が見れるようにガラス窓が設けられていた。が、実際のところ、あまり中身は見えない。本来ならあってもいいはずの内側の照明が無く、少し暗い小屋の中ではよく見えない。そればかりか、張られているのはスモークガラスのようで、ライトを当ててもぼんやりとしか内側が良く見えない。蓮栖は目を細めて内側を何とか見てみたが、何だか金属のようなものが反射しているのしか確認できなかった。

「…こんなに金、払えっていうのかよ…。殆ど、詐欺だぞ」  
購入するといえば、価格はどうなんだろうか。そう思い、彼は先の装置の上にある案内を確認した。

S E R V I C E / V A L U E  
: 1 0 , 0 0 0 S / V

「はあ!?!」

と蓮栖は叫んだ。

「10000!?!?10000!?!?何で、んな高いんだよ…!?!?」

10000S/Vで買えるモノ。それは今の蓮栖の頭の中では一つしか浮かばなかった。

アンダーコート  
海底管道の片道切符

彼は自分の掌を押した。こうすることで中の素子チップに電気が発生し、脳にそれが流れて残金が分かるようになっていく。

「…はあ…」

頭の中を覗くように視線を上に向けながら、彼はため息を付いた。彼の頭の中の架空のメーカーは、彼の全財産が10000S/Vであることを知らせた。つまり、この販売機の商品を買ってしまったら、残金ゼロ、という訳である。しかし、そういう訳にも行かなかった。

蓮栖は、この残金で帰りの切符を買うつもりでいた。

なぜ先延ばしにしたのか。恐らく興奮のせいだったのだろう。元々はこちらについた最初の日におうと決めていたのだが、いざ来てしまうとそれどころではなくなっていた。何せ世界の文化の中心地なのだ。楽しくないはずが無い。それで殆どを使い果たし、今日の状況に至った。

しかし、蓮栖は後悔していなかった。

気が楽だった。

この国のこの大きさに迫られ、弱体化していく自分の国と周りの人々が嫌になって来たというのに、全然息が苦しくなかったのだ。それどころか、自分の全ての気持ち、全ての考えの底にあった強迫観念が自然と消えていた。何故だかは知らないが受け入れられたような気持ちがあったのだ。

だから彼は小遣い帳に、それらの出費を《必要出費》として登録した。

文字にしてみると尚のこと嬉しかった。

しかし、こんな事態になるとは考えてもいなかった。蟹の自動販売機がないと分かったし、あとは写真でも撮って、明日辺りにはさつさと帰ろうとさえ思っていた。今日、地盤卓から降りたのは、本当にただの気まぐれだった。

腕を組んだ。

貧乏ゆすりをした。

自動販売機の前を何往復も歩いた。

もしここで10000使ったら。きつとあの長い管道の中を歩くか、親に送金もしくは迎いに来てもらわなくてはならなくなるだろう。

しかし、彼は歩いて帰るのも嫌だったし、親を頼るのは尚更嫌だった。

では、このまま何もせずに、行き乗ってきたロープウェイに乗って地盤に昇り、そのまま帰るのか。

だが、それも何だか嫌だった。

彼の頭の中で、沢山いる頭の中の住人の誰かが

蓮栖、野郎、何やってんだ。こりゃ運命のお告げだぞ。

とさつきから頻繁に囁いているのだ。

普段の彼だったらとんでもない、と答えるだろうが、今日はそう信じざるを得ない状況が相次いで続いた。まさか、と思った方法で小屋に入り、無いと思っていた自動販売機を見つけた。

つい数時間前まではこんなことは想像もしなかった。こういう出来事の連続を『運命』と称しても、反論できなかった。

「…どうする、どうする、どうする」

ひたすら思考を垂れ流した。どうせ誰もいないのだ。聞かれる心配もあるまい。

「どうする、どうする…どうす…る…」

蓮栖は自動販売機の前で立ち止まった。そして、ガラスに映った自分の顔を見た。

ガラスに映った自分の顔は困り顔ながらも、とても楽しそうだった。

この国を畏れていた。それで苦しんでいたはずなのに、いざ来る

とこの調子だ。

彼は今までの自分の人生を振り返り、この数日をまた振り返った。案じてばかりいた自分。この旅も、そもそもは去年考え付いたものだった。しかし、それからとりあえずいちゃもんをつけては、自分を行くことから遠ざけた。

蓮栖は掌を見た。

今までこの掌を見て、何度も諦めた。

今回もそうだ。

蓮栖は顔を上げた。

「今回も、そうだ」

すると認識装置の前に立った。まだ後ろ髪を引かれる気分が残る。

しかし、拳を握ってそれを振り切った。その弾みで、その拳を、装置の前にかざした。

ピ

装置の表面に描かれた青い円が仄かに光、送金を確認した旨が表示された。

そして顔を上げようとした瞬間、

ガトン

という音がして、

「え？」

何かが彼の左肩に凭れかかった。



## 第2話（後書き）

ええ〜…面倒ですね。まだヒロイン出てこないんですよ…

### 第3話

「ひっ!?!」

思わず悲鳴を上げてしまったが、少し身を引くだけで肩からそれは落ちなかった。

「…?」

さっきまでの爽快感は、この突然の出来事にかき消された。

気分を落ち着かせ、自動販売機の方を向き、ウィンドーに張られているガラスを見た。

「そっか…」

自分を落ち着かせるように蓮栖れんすはそう言った。

「透化ガラスだ…」

恐らく、普段はあやってガラスの形態を構成していて、商品が出る透化ときだけ非物質化するようになっているのだろう。

そう気がつくのと、自然と恐怖心は消えた。蓮栖は両腕を自分の肩に凭れかかっているモノの後ろに回した。

大きさは一人分くらいだろう。重さは左肩に凭れかかっているからか、重く感じるが、実際は軽い方かもしれない。なるほど、表面はアルミホイルらしきもので包まれている。さっきライトを当てたときに、販売機の中で鈍く反射していたのはこれだろう。

暫く眺めると、彼は回した手を少し自分の方に持つてきて、人差し指と親指を出し、何かつまむような形にした。そして、それをア

ルミホイルの表面にもっていき、少し剥がした。

「……？」

向いたものの、その内側にもまたアルミの鈍い銀色が現れた。どうやら、何重にも包まれているらしい。

蓮栖は、そのまま手を動かし続け、ホイルを剥がしていった。

剥がす。

また、ホイル。

剥がす。

ホイル。

剥がす。

すると、そこに見えたのは、鈍い銀色ではなく、白っぽい色であった。表面の感じも、いままでのアルミとは違う。むしろツルツルしているように見えた。

しかし、1cm×1cmの穴からでは何も見えない。

蓮栖はそのまま少し腕を上げ、自分の肩に凭れかかっているもののでつぺんに爪を立てる。そしてそつと且つギュツと力を入れて、アルミホイルを引っかいた。

案の定、ホイルはてっぺんで大きくはがれ、蓮栖の側に捲れ上がっている。片方の手をその後ろに回してバランスを取りながら、捲れ上がった部分を掴み、彼は思いつきり、ホイルを剥がした。

ビリっ、という鈍いとも高いともいえない音がなった瞬間、また、肩に何かが乗ったような感覚がした。

それだけではない。

彼の頬に、何か柔らかい繊維のようなものが触れた。それを感じ取った蓮栖は、なにかが乗った自分の左肩を見た。

少女の頭が乗っていた。

顔をややこちら側に向けて、眠りについている。長い睫はが若干反って、綺麗な弧を描いている。その上には弓のように綺麗に反れた細い眉があつて、髪と同じ濃い茶色をしている。

肩にかかる少女の髪。

知識のない彼には、その長いとも短いともいえない髪型の名前は分からなかつた。

だが、そんなことはどうでもよかつた。その有無が分からないほどの髪の柔らかさが、華奢だとは言え、がっしりとしている彼の肩を通じて伝わってくる。

少し乱れた髪が、頬にまとわりついている。

小さくて、綺麗な頭。

そんな頭が、彼の肩に全てを委ねていた。そこから感じる重みや柔らかさが、蓮栖の心を締め付ける。締め付けられた心は、甘い汗を出している。

あまりの事態の動転ぶりに、戸惑っていたが、次第に頭がしゃんとしてきて、状況をよく考えられるようになっていく。

その少女の頭はホイルから出ている。その下に小さく細い首も覗く。きつと、全身がホイルで包まれていたのだ。

とりあえず、少女を今の状態から、床に寝かすことにした。

ふと、その時、手の甲が少女の白い頬にあたった。冷たかつた。

第3話（後書き）

ムムム…また次回、  
ですね…

## 第4話

自分が罪を犯したのではないか、という不安は、氷に似ている、と蓮栖は思った。その氷を溶かすため、様々な思考が彼の周りに纏わりついた。さっきの素子もそう。一時の慰めにはなるが、よく考えれば、自分が罪を犯していない証拠にはならない。

ひよっとしたら、自販機の中で冷やされた際に、ただ単に素子が壊れただけかもしれない。そう感じてガツカリする。不思議なのは、そうやって、自分の安心感を崩すのも、自分自身であるということだろう。

蓮栖は何回も離れようかと思った。しかし、腰くらいまでが小屋を離れようとしても、脚の裏が地面にくっついたかのように離れないのだ。

運命力かな、と彼は思った。心より、脚の方がそういう物に敏感なのか、と。

<sup>チップ</sup>素子を押せば時間は分かるが、彼は敢えて押さずに待っていた。ずっと立ちながら、床で横になっている少女の寝顔を見る。

白いだろう。今は、外から差す僅かな光にトタン屋根の青が混じってよく分からないが、きつと少女の肌は白い。睫は相変わらず長くて、ゾツとさせられる。先ほどまでホイルで包まれていて見えなかった体つきもスリリとしていて、全体的にバランスは良い。もし、ここで自分が離れたら、この少女はどうするだろう。

場所は分かるのだろうか？

ちゃんと遙か上にある市街地にたどり着けるだろうか。上に行くためのモノレールはすぐに乗れるが、駅に行くまでが大変だろう。ここから数時間歩くことになる。それまでに、この暑い中たどり着けるだろうか？そもそも、水を買うためのお金は…？

そう考えると、犯罪を犯したとはいえ、逃げずに少女の傍にるのが、やはり賢明だろう。勝手に自動販売機から解放（？）され、勝手に炎天下に投げ込まれた。それではあまりにも理不尽すぎる。

第一、こんなに綺麗なのに…。

そう思いながら、蓮栖は屈み、少女の頬に掛かった髪を払った。もう冷たくはなく、やや体温も感じられる。それに続いて息が彼の手首に当たった。

変化があつたのはそれから数分後のことだった。

段々暑さを感じてきて、蓮栖は電化衣服オートユニカの温度を少し下げた。暑さは和らいでいく。そこで気がついたのは少女の服だ。温度を調節する機能がついていないように見える。洒落にならない位に暑いだろう。なのに、少女は汗をかいていなかった。自販機の冷気は、もう完全になくなっているはずなのに…。

と、思った瞬間だった。

「う…ん…」

物憂げな吐息が聞こえた。少女からだ。蓮栖は思わず顔を少女のそれに近づけ、叫んだ。

「だ、大丈夫か…？」

真開いた蓮栖の目の前で、少女の瞼がピクピク震え、徐々に開く。

目が開いた。

「…」

「…」

もちろん、蓮栖の視界に映ったのは少女の瞳だ。

ただ、そこに少し珍しい感じを覚えた。多分、自分と同じ人種だろうが、黒い色素が全体的に薄くて、まるで《西側》の人々のそれのようだった。

少女は動かず、ただ蓮栖を真っ直ぐ見つめる。生まれたばかりの赤ちゃんみたいだな、と思いながら、蓮栖は、ただただそわそわするだけだった。それでも少女は、ただただ自分を見つめてくる。

「や、やあ…」

思わずそんな声が出た。

「…」

少女は答えない。

「あ、暑くない…?」

やっと少女の瞳が動いた。自分の身体の方を見て、また視線を戻したかと思うと。

「…暑くない」

囁くような、細い声。

「本当?」

「…うん」

「俺の、これ、貸すけど」

そう言っつて蓮栖は自分の電化衣服の裾を持ち上げる。

「冷たくて、気持ちいいよ…?」

「いらない」

「…あ、そっ…」

少女の小さな手を持つて、上体を起こした。

蓮栖がその精神状態を荒ぶらせている一方で、少女はどこかぼつととしている。表情もまるで寝起きのそのもので、小さく首を動かして、辺りを見ている。

はぁ、と軽く深呼吸すると、蓮栖は屈んで目線を少女と同じところに持ってきた。

「…どうしてあんなところにいたの?」

「あんな、ところ…?」

まだ少し眠そうな顔をして少女は言う。

「ほら、あれ。自動販売機」

そう言っつと蓮栖は震える手で自動販売機を指した。

「あそこの中から出てきたんだよ…」

「…そうなの」

「ひょっとして、何も覚えてないの…」

蓮栖と自動販売機を交互に見ながら、少女はしばらく黙っていた。

「わたし、は…」

と少女は不器用に話し出す。

「わたしは…せ、んせいに…よば、れて…」

「…先生？」

少女がぼんやり頷いた。

「せんせいに、呼ばれて…、薬を飲んで…」

段々と口調がはっきりしてきた。

「…薬を飲んだの。飲めば気分が良くなるって、先生が言って…」

「『先生』って誰だ？」

「薬を飲んで、水を飲んで、そのままゆっくりソファに座って…」

「それで？」

少女は話すのを続けようとして、何かに気がついたのか、少しハツとした。

「…分かんない…」

「え？」

「その先の、記憶が、さっぱりない、の…」

そう言うと、また黙った。さっきまでは流れ出るかのように話し続けていた。ただ、辛そうだった。必死に思い出したことを、すぐに言葉にしていたように見えた。

「そっか…」

それを悟ると蓮栖も質問をきっかり止めた。不思議なことに、さっきまで感じていた不安が消えていた。少し冷静な気分になれた。

この子は置いていこうか、と蓮栖は思った。

オートコミュニケーションオートコミュニケーション電化衣服を着なくても、暑さを感じないらしい。素子チップもない。

殆ど半裸だけど、そこまで問題にもならないだろう。何より綺麗だし、すこし人間離れしている雰囲気がある。

一体どうしてあんな場所から出てこれたのかはさっぱり分からなかったが、ただ彼女を解放できただけで十分だ。

これで満足して国に帰れる。

「上行きの手ヤトルはここから暫く歩いたところにあるからね」  
立ち上がって少女に優しく語りかけた。

「気をつけて」

そう言い、小屋を出ようとした。

すると、足首を小さな手が掴んだ。思わず蓮栖は足元を見た。

「行かないで」

少女の声だった。すごくハッキリしている。

そうじゃない。

彼女は、叫んでいるんだ。

「お願い、行かないで…」

足首を掴む彼女の手が震えている。彼女自身も震えている。顔から血の気が引いている。

「行かないで」

蓮栖は押された。一体、どうして少女はここまで震えるんだろう。

蓮栖の頭の中も真っ白になる。

ただ、やがて胸の中が少し暖かくなった気がした。優しい気持ち  
ができて、自然と笑みが浮かんだ。

「…分かったよ」

少女の手を取って、立たせた。彼女の身長が殆ど自分と変わらない  
事に気がついた。

「…背、高いんだね」

殆ど独り言のつもりで言った蓮栖だったが、少女は頷いた。

少女の方を見ると、前の方が少し肌蹴ている。それを見るなり、  
蓮栖は直した。蓮栖の少し荒っぽい直し方に、少女の身体も少し揺

れる。少し無抵抗なその感じを見て、若干蓮栖は焦った。

「…はい」

白い肌が見えない程度に服を直すと、小屋の外に歩みだした。少女も少し出遅れてきたかと思うと、すぐに追いついて彼の元を離れなかった。

強い力で繋がれた手が、冷たかった。

#### 第4話（後書き）

読んでくださってありがとうございます。作者のダネクンです…。  
さて…ヒロインが登場して、やっとタグに付け加えるはずだったボ  
ーイ・ミーツ・ガールになったんですけど…。何だか、いま一つ、  
あまりキュンと来ないなあ…。つてもがきながら書いてました。もち  
ろんまだまだ続きますよ！？そこら辺で頑張ろうかな…。あ、あと  
まだ少し話が暗いので、もう少し明るくしていきたいです。  
それまでにやるのが色々あるんですけどねえ…

## 第4・5話

「暑つつ…」

額にももの凄い量の汗がついていることに気がつき、蓮栖れんすは腕で拭った。

オートチュニカ電化衣類が全く役に立たないのである。彼の国や、今はその一部が見える地盤卓の上では絶対にありえないようなことである。こちら一体がずっとアスファルトで舗装されているせいだろうか。一面グレーに染まっている、この地面が照らし出しているんだろうか。

隣で歩く少女を見やる。

信じられないことに余り暑そうにしている感じが見えない。

「…ねえ」

蓮栖は声をかけた。

「暑くないの？」

少女は頷いた。

「…イカれてるよ」

さっきまでは蓮栖が彼女を先導するように歩いていたが、今は彼女が彼を先導するかのようには歩いていた。

さっきから暫く黙って歩いていたが、段々堪えられなくなってきた。そわそわしている気分はもう完全に暑さにやられていたが、この静けさは蓮栖の暑さをより感じさせる原因の一つになっていた。

「…ねえ」

少女に声をかけた。

「僕は、近藤蓮栖。君の名前は…？」

さつきから何を言っても、まるで視界の片隅にも入っていないかのように無視されている。ひよっとしたら、何を言っても聞いてもらえないのでは、と蓮栖は思っていた。

「…ナ」

しかし、答えは返ってきた。

「ゴメン…聞こえない」

今度は耳を澄ませ、蓮栖も聞いた。

「…ルナ」

「…ルナ、かあ…」

ルナは月の女神の名前だと蓮栖も知っている。しかし今、彼の頭上で激しく輝いているのは太陽だった。

「ねえ、ここは状況に準じて、名前をソル、にするのはどう…？」

暑さでおかしくなったのか、蓮栖はそう言つと笑い出した。

勿論、少女 ルナは答えなかった。

#### 第4・5話（後書き）

ダネクンです。今回もありがとうございます。

さて、やっとタイトルにもなったヒロインの名前・ルナが本文に登場しました。

でも、この出し方はどうなんだろう、と自分でも思ってしまう始末です。すみません…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7338u/>

---

ルナ

2011年8月14日22時49分発行